

# ヘリコバクター・ピロリ菌



医師 丸直子 末

酸による殺菌を免れるのです。殺菌を逃れた菌は粘液層で増殖し、またアンモニアなどが走化性因子として周囲の菌を呼び寄せ、粘液層にピロリ菌の感染巣が形成されます。

下層にピロリ菌の感染巣が形成されます。

ピロリ菌はそこで粘液層を破壊し、防御機能が壊れるため強酸が胃の粘膜を傷め、炎症が起ります。これが胃炎です。悪化すると胃潰瘍となります。この炎症が起きて修復する、また起きて修復するといった過程の繰り返しで細胞のがん化につながります。つまり胃がんや胃MALTリンパ腫といった腫瘍の原因となっているのです。

ほかにどのような病気を引き起こすかというと、特発性血小板減少性紫斑病という病気や、萎縮性胃炎、胃過形成性ポリープ、機能性ディスペプシア(げっぷ、食欲不振、嘔気、胸焼けなどの症状)、鉄欠乏性貧血、慢性蕁麻疹などです。

ピロリ菌があるからといって必ず何らかの病気になるわけではなく、必ず胃がんになるというわけでもありませんが、厚生労働省研究班「多目的コホート研究(JPHC研究)」の結果で、胃がんになつた方の94%はピロリ菌に感染していたことが分かりました。ピロリ菌による胃炎が引き起こす病態は、除菌により病気が改善することが分かっています。胃がんは、なつてしまつたと改善効果はありませんが、除菌をすることで予防ができます。

どのようにして除菌を行うかですが、抗生物質(アモキシシリンとクラリスロマイシン)を7日間内服します。これで7~8割は除菌できます。除菌できなかった次の抗生剤(クラリスロマイシンとメトロニダゾール)を7日間内服します。それで8~9割が除菌できるのです。

もちろん、ピロリ菌以外にも胃が荒れる原因はあります。暴飲暴食やアルコール過剰摂取、抗炎症薬(痛み止め、熱さましなど)はピロリ菌がいなくとも「炎症」を起こします。しかしピロリ菌がいることでさまざまな病気のリスクが上がるので、から、感染していることが分れば除菌したほうが良いのです。

ピロリ菌に感染しないよう注意したいところですが、残念ながら予防策は特にありません。なぜなら感染経路がはっきりと分かっています。口-口もしくは糞-口感染といわれており、乳児期、小児期に口移しなどの接触や、糞便に汚染された水・食品を介した感染と想定されています。大人は感染しないといわれていますが、よく分かっています。

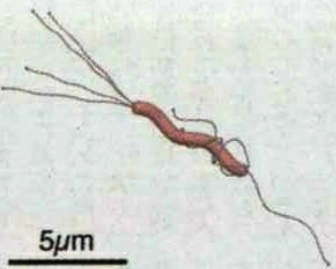
先ほど申し上げたように、ピロリ菌が感染していることでさまざまな疾患が引き起こされる可能性が高まるということが分かっています。現在、除菌の保険適用があるのは、ピロリ菌が陽性で、胃潰瘍・十二指腸潰瘍を認める方のみとなっています。しかし、このことが分かれば、除菌をおすすめします。

(梶川病院(広島市西区天満町)内科 末丸直子医師)

ピロリ菌という名前を聞いたことはありませんか。名前からは、かわいい菌を想像してしまいがちですが、実はいろいろな病態を引き起こす怖い菌です。

ヘリコバクター・ピロリ菌(ピロリ菌)は胃に生息しています。通常、胃の中には非常に強い酸があり、胃の粘膜は強酸から自分自身を守るため、粘液を出して防御しています。それほど強い酸の中で本来菌は住めないはずですが、ピロリ菌にはある能力があり、胃に生息することができるとのことです。

胃内に侵入したピロリ菌は、鞭毛を使って粘液層内部に泳いで移動し、上皮細胞の表面に付着します。この粘液層の内部もまた酸性度の高い環境であるため、通常の細菌はそこに定着することはできませんが、ピロリ菌の持つウレアーゼは、粘液中の尿素を二酸化炭素とアンモニアに分解し、生じたアンモニアが粘液中の胃酸を中和し、



胃酸を中和し、

ピロリ菌があるからといって必ず何らかの病気になるわけではなく、必ず胃がんになるというわけでもありませんが、厚生労働省研究班「多目的コホート研究(JPHC研究)」の結果で、胃がんになつた方の94%はピロリ菌に感染していたことが分かりました。ピロリ菌による胃炎が引き起こす病態は、除菌により病気が改善することが分かっています。胃がんは、なつてしまつたと改善効果はありませんが、除菌をすることで予防ができます。

どのようにして除菌を行うかですが、抗生物質(アモキシシリンとクラリスロマイシン)を7日間内服します。これで7~8割は除菌できます。除菌できなかった次の抗生剤(クラリスロマイシンとメトロニダゾール)を7日間内服します。それで8~9割が除菌できるのです。

もちろん、ピロリ菌以外にも胃が荒れる原因はあります。暴飲暴食やアルコール過剰摂取、抗炎症薬(痛み止め、熱さましなど)はピロリ菌がいなくとも「炎症」を起こします。しかしピロリ菌がいることでさまざまな病気のリスクが上がるので、から、感染していることが分れば除菌したほうが良いのです。

ピロリ菌に感染しないよう注意したいところですが、残念ながら予防策は特にありません。なぜなら感染経路がはっきりと分かっています。口-口もしくは糞-口感染といわれており、乳児期、小児期に口移しなどの接触や、糞便に汚染された水・食品を介した感染と想定されています。大人は感染しないといわれていますが、よく分かっています。

先ほど申し上げたように、ピロリ菌が感染していることでさまざまな疾患が引き起こされる可能性が高まるということが分かっています。現在、除菌の保険適用があるのは、ピロリ菌が陽性で、胃潰瘍・十二指腸潰瘍を認める方のみとなっています。しかし、このことが分かれば、除菌をおすすめします。

(梶川病院(広島市西区天満町)内科 末丸直子医師)